

砂漠化防止に寄せて

佐々木 敏 雄*

現在、地球規模的な環境問題として酸性雨、地球の温暖化、砂漠化などの諸問題が世界の注目を浴びている。前二者は、化石燃料の燃焼による影響であることは明らかである。アフリカの恒常的な食糧不足の大きな原因として、砂漠化の進行による生態系の変化があげられる。

この砂漠化が原因となり食糧不足の深刻化が進み、人口が都市に集中し、先進国とは異なる「産業のない都市化」現象となっている。この都市の消費するエネルギーの大部分は薪と炭であり、サヘル地方（サワラ砂漠に南接する地域）全体で84%に達するといわれている。木の成長量に比べて何倍もの薪が切り出されている。また、アフリカの放牧地帯では、人間が1人増えると家畜が1頭増えるとよくいわれており、草や木の葉の生産量に比べて2倍以上の家畜が飼われている地域も多い。

加えて人口増による新たな耕地の需要から放牧地にまで畑が進出し、砂漠化を促進させている。さらにサヘル地域の大部分の土地は不毛で水を吸収する力が弱く、雨季の豪雨時には、1年分の雨量が数日間にまとめて降る地域も珍しくないといわれている。

豪雨は、地面にしみ込まないまま表土浸食を起し、農業生産のプレーキになっている。このような被害が広がったのは、サヘル地域の半分以上の緑地を焼き畑、薪取り、伐採、放牧などで失ったことによる大規模な環境破壊の結果であろう。

緑を失ったがために表土は流され、そして土壤の荒廃の最終的な形態が砂漠である。食糧、燃料、水、飼料などアフリカの危機要件はいずれも緑と密接な関係があるという事実は否定できない。従って緑を失うことは、アフリカのような熱帯地方では、決定的に土地を荒廃させることにつながるわけである。これまで、さまざまな援助がアフリカに投じられてきたが、残念ながら実を結んだものは数えるほどしかないといわれている。その中で日本の植林計画は大いに注目されているようである。

筆者等は、1昨年北海道アフリカ協会の一員として堂垣内前知事を団長とする“GREEN SAHEL 88”（サヘル植林運動）を通じて、アフリカ理解の旅に参加する機会

をえた。外務省の後援で目的地は、ナイジェリアと決定した。ナイジェリアは、我が国の政府開発援助（ODA）の最大供与国となっており、その援助の一環としてカドナ州では「半乾燥地域森林資源保全開発現地実証調査」プロジェクトを進めており、試験造林に着手している。

1年間に約5 kmの速度で南進し、50年間に日本の約1.7倍にもあたる面積の土地が砂漠化していくという深刻な地球環境の破壊を前にして、このプロジェクトに対するナイジェリア国民の関心は極めて高い。我々一行は、成田～（マニラ）～カラチ～ナイロビ～ラゴス～カドナと実飛行時間27時間余りで目的地カドナに到着した。初めての民間使節団、それもボランティアの植林使節団としての我々を迎える現地では、現地商工会議所を中心に州要人、各団体から大変な歓迎を受けた。

カドナ市内より16km離れたところにある植林地のアフアカ地域の整地は、既に日本の国際協力事業団（JICA）職員の手配により完了していた。

当日は両国の国家斉唱、両国代表の挨拶（堂垣内団長とカドナ州知事）、記念植樹などのセレモニー終了後、現地の人達の協力を得て一斉に植林作業にかかった。ユーカリの苗木を3 m間隔に一人30本約1ヘクタールに3,000本の植樹を実施した。焼け付くような炎天下、汗水流して植えられた若木はやがて大きく成長し、日本・ナイジェリアしいては日本・アフリカの友好、親善の象徴として印象づけられることを固く信じて……………。

筆者にとってはアフリカは遠い未知の国であり、その遠い異国の地で例えわずかであっても緑の復活のための植樹は、同時に筆者等にとって心への植樹でもあった。肌の色が違っても、一緒に植林したり握手したりするうちに少しの違和感もなく、親愛で素朴な心情の民族との感を強くした。このたびの道民ツアーが現地で大歓迎を受け、それなりの役目を果たせたことにいささか満足感を覚えるとともに、心にも植えた木が大きく成長し、地球環境保全の根を張り、国際協力に役立ついささかの力ともなればと思う。

筆者等は本年12月再びナイジェリアを訪れ植樹の成果を確認する予定である。

*元第2研究部長 現北海道開発コンサルタント株式会社相談役